

## 暑さへの恐怖

—『楚辭』『招魂』及び漢魏の詩賦に見える暑さと涼しさ—

高 芝 麻 子

## 序

松浦友久『中國詩歌原論』<sup>①</sup>「中國古典詩歌における『春秋』と『夏冬』」が、「中國古典詩における春秋と夏冬の差異として第一に指摘すべき點は、春秋の詩の多さと夏冬の詩の乏しさ、という明白な事實である」(P.9)と述べているように、中國古典においては夏冬の詩は春秋の詩に比べて壓倒的に少ない。松浦友久はその理由を「詩的季節としての夏冬について、もし強いて共通感覺を求めようとすれば(中略)生理的感覚に關するものだけであり、心理、心情の次元に關する共通感覺としては、ほとんどまったく成立していない」(P.9)ためとする。詩のみならず、數量の上での春秋へのかたよりは、賦においてもおおよそ變わらないものと思われる。しかし、『楚辭』や漢魏の詩賦を紐解いたとき、暑さを描く作品には、暑さに對する不快感や苦痛といった生理的感覚だけでは片付けることのできない、人々に共有されたある心理が見いだせる。本論は、詩賦における暑さや、その中に生じる涼しさの描寫から、夏の心理の一端を明らかにしようとするものである。

まず文學以外に見える漢魏のころの寒暑觀に觸れておきたい。『禮記』『祭法』や『孔叢子』には、四時や日月の祭祀などと並べて、坎壇を設けて寒暑の神を送迎することが記されている。また、『尚書』「洪範」の庶徴の項には、天から與えられる様々な徴候の中に寒さ、暑さを擧げている。君王がすぐれた觀察力を有すればほどよく暖かく、暑さを擧げればほどよく寒く、なおざりであれば暑さが長引き、せっかちであれば寒さが長引くとするのである。あるいは、董仲舒『春秋繁露』卷十一には君王が喜べば暖かくなり、怒れば寒くなるとある。このように寒暑は祭祀の對象であり、また天と君王が感應したときに變化するものとされた。これら儒家的な寒暑觀は、同時代の文學作品とどのように關わってくるのであろうか。

なお、本論で扱う作品の多くは、宮廷内で支配者のために制作されたものである。そこに見える寒暑温涼は、氣温、室温のみならず、その支配者の人徳や彼を取り巻く場の雰囲気をも指しているものと思われる。だが、古典作品を現在讀み解くに際し、描かれた寒暑温涼が兩者のいずれであるかを嚴密に判斷してゆくことは、非常に困難である。本論では假にそれらを區別せず、寒暑温涼がどのように表現され、そ

の表現がどのような意味を持っていたのかに着目し、論じていきたい。

## 1 在冬不涼、在夏不暑

漢魏の詩賦が宮殿を描くとき、多くは様々に言葉を書き添えてその廣さ、美しさ、莊嚴さ、豪華さなどを稱える。その中にしばしば描き込まれるものに、暑さや寒さに侵されない場所への贊美がある。

たとえば『楚辭』「招魂」では、宮殿の素晴らしさを語って魂を招こうとし、「冬にも突厦有り、夏にも室の寒きあり。(冬有突厦、夏室寒些。)」と述べる。そこに附された王逸の注には「隆冬の凍寒にも、則ち大屋有りて、複突にして温室、盛夏の暑熱にも、則ち洞達陰堂有りて、其の内の寒涼なるを言ふなり。(言隆冬凍寒、則ち大屋、複突温室。盛夏暑熱、則ち洞達陰堂、其内寒涼也。)」と見えている。すなわち、冬の寒さをしのぐための温かい部屋と、夏の暑さをしのぐための涼しい部屋があることが、ここでは宮殿の素晴らしさを描き出し、彷徨う魂を招く言葉となっているのである。

この發想は後世の宮殿描寫に引き継がれる。『三輔黃圖』卷三未央宮の項によれば前殿の中心である宣室殿の東西に、清涼殿、温室殿が配され、温室殿は「武帝建つ、冬に之に處れば温暖なり。(武帝建、冬處之温暖也。)、清涼殿は「夏に之に處れば則ち清涼なり。亦た延清室と曰ふ。(夏處之則清涼也。亦曰延清室。)」とある。すなわち、温室殿は冬に温かく、清涼殿は夏に涼しい宮殿なのである。『文選』卷三十四曹植「七啓」では、鏡機子が隱者たる玄微子に仕官を勧めようとして、宮殿の素晴らしさを述べる中に「温房は則ち冬にも絺綌を服し、清室は則ち中夏にも霜を含む。(温房則冬服絺綌、清室則中夏含霜。)」とあり、「温房」は冬でも薄着で過ごせるほどに温かく、「清

室」は夏でも霜があるほど涼しいと述べている。

三國魏・何晏「景福殿賦」は、『文選』卷十一に二首採録されている宮殿賦の一つであるが、そこにも以下のような句が見える。

温房は其の東序に承ぎ、涼室は其の西偏に處す。建陽を開けば則ち朱炎豔として、金光を散れば則ち清風臻る。故に冬にも凄寒ならず、夏にも炎燁無し。(温房承其東序、涼室處其西偏。開建陽則朱炎豔、故金光則清風臻。故冬不凄寒、夏無炎燁。)

景福殿には東と西に「温房」と「涼室」という場所があり、それらはそれぞれ冬に温かく、夏に涼しいというのである。この賦の制作理由については、『文選』李善注に引かれた『典略』は「魏明帝將に東巡して、夏熱を恐れ、故に許昌に殿を作り、名づけて景福と曰ふ。既に成り、人に命じて之を賦せしむ。(魏明帝將東巡、恐夏熱、故許昌作殿、名曰景福。既成、命人賦之。)」とする。『三國志・魏書』卷三「明帝紀」によれば「(太和六年)三月癸酉、行きて東巡す。(中略)夏四月壬寅、許昌宮に行幸す。(中略)九月、摩陂に行幸し、許昌宮を治め、景福、承光殿を起つ。(三月癸酉、行東巡。(中略)夏四月壬寅、行幸許昌宮。(中略)九月、行幸摩陂、治許昌宮、起景福、承光殿。)」とあり、魏・明帝が東巡し、夏に許昌宮を訪れ、秋に景福殿と承光殿とを造營したとされている。すなわち、景福殿は許昌宮の内に造られた建物であり、正史の景福殿造營記事には暑さを恐れたことや、賦を作らせたという記載こそ見えないが、『典略』の記事と矛盾しない。この賦は、その完成にあたって明帝に命じられて作った賦であると考えてよいだろう。「景福殿賦」本文に「南に於いては則ち承光の前殿有り、賦政の宮なり。(於南則有承光前殿、賦政之宮。)」とあり、景福殿が承光殿の北に位置し、政務を司る承光殿が前殿、景福殿は後

殿であつたようである。

その景福殿の完成に際して王朝から制作を命じられたのであれば、この賦は公式な場で作られた賦と理解すべきであろう。『文選』に採録された「景福殿賦」は何晏の作品のみであるが、『全魏文』には卞蘭、韋誕、夏侯惠の同様の賦が見える。彼ら三名は曹道衡『中國文學者大辭典 先秦漢魏晉南北朝卷』によれば、いずれも明帝に仕えたことが分かっている者であり、これらの賦が明帝の命によってなされた競作である可能性も考えられる。その卞蘭「許昌宮賦」と韋誕「景福殿賦」にも、「溫房」「涼室」についての言及がある。

卞蘭「許昌宮賦」(部分)：其の陰に則ち望舒の涼室、羲和の溫房有り。隆冬にも絺を御し、盛夏にも裳を重ぬ。一字の深遠を同じうし、寒暑を陰陽に致す。(其陰則有望舒涼室、羲和溫房。隆冬御絺、盛夏重裳。同一字深遠、致寒暑于陰陽。)

韋誕「景福殿賦」(部分)：則ち望舒の涼室、羲和の溫房有り。玄冬には則ち煖たり、炎夏には則ち涼たり。寒暑を區宇に總じ、天地の陰陽を制す。(則有望舒涼室、羲和溫房。玄冬則煖、炎夏則涼。總寒暑于區宇、制天地之陰陽。)

卞蘭は「許昌宮賦」と題しているが、韋誕賦との近似から、この件は景福殿を描いたものであらうと考えられる。また、卞蘭と韋誕の描く「羲和溫房」「望舒涼室」は、何晏の描いた「溫房」「涼室」と同じものと考えて間違いないだろう。ここに見える「羲和」とは太陽の御者、「望舒」とは月の御者であり、太陽と月の比喩にも用いられる。太陽が「溫房」、月が「涼室」に冠せられているのは、陽の光が温かく、月が涼やかであるためであらう。「溫房」と「涼室」とは東西、日月、溫涼、避寒避暑という對をなす。正殿の東西に配された「溫房」

と「涼室」とが様々な意味においてシンメトリーをなしているのである。世界を統治する君王、皇帝の住まいである宮殿は、それ自體が天地の統制に寄與する力を備えていなくてはならない。賦に描かれた景福殿は、日月を冠した「溫房」「涼室」を東西に備えるために、宮殿内の陰陽のバランスが取れており、それによって宮殿が全宇宙(一字)と同じくらい深遠(深遠)な存在となりえ、あるいは、天下(區宇)の寒暑をも統べ、天地の陰陽をも制御しうるとされている。

次に後漢・張衡「冢賦」を見たい。この賦は宮殿ではなく墓を描いたもので、己の墓の場所を定め、その土地と墓室とを描き、「幽冥は既に美たり、鬼神は既に寧たり。之に降すに福を以てし、于りて以て之平らぐ。(幽冥既美、鬼神既寧。降之以福、于以之平。)」と墓を稱えて結ぶ。現存するのは斷片のみであり、引く類書によって細部が異なるが、本稿では張震澤校注『張衡詩文集校注』の本文に従う。

奔奔將將として、棟を崇くし宇を廣くす。冬に在りても涼しからず、夏に在りても暑からず。祭祀は是に居き、神明は是に處る。(奔奔將將、崇棟廣宇。在冬不涼、在夏不暑。祭祀是居、神明是處。)

ここに見える墓は、冬にも寒くなく、夏にも暑くないものとして描かれ、さらに、そこが祭祀の場であり、神明の居場所であると描寫されている。宮田登ほか『日中文化交流史叢書5民俗』によれば、漢代の墓は皇帝一族以外のものであっても、しばしば廣い複數の部屋を有しており、「墓の構造は完全に地上の居住建築の模倣」であって、「後漢になると、墓室内で祭奠活動も行えるようになると、縦井戸式の墓道から斜面状、または階段状のものに改められた型が普及した」という(P341)。實際、墓の中は死者の生活の場と考えられ、かつ祭祀も

行われていたのであり、「冢賦」はその状況を反映している。ここで言う「神明」とは祖先の靈を指すものである。小南一郎「漢代の喪葬儀禮——その宇宙論的構造」は、後漢時代、死者の魂が少なくとも一定期間、墓中に生活するという觀念が廣く定着したことから、墓室の内部が生前の居室を模するようになったと述べている。また、墓室には、夫婦をともに葬ること、天上や壁に西王母、東王父、日月、風神と雨神など、宇宙を二分する兩要素が描かれていることを指摘し、このような構造は、死者がやがて赴く天上世界では陰陽が統合されている、という考えを反映するものであるという。冬にも涼しからず、夏にも暑からざることが、宮殿の場合と同様、墓室においても陰陽の統合の一翼を擔っていたのである。

## 2 酷暑の中の涼しさ

前章では夏に涼しく、冬に温かいという性質を持つことが、宮殿にとつて重要な意味を持つことを論じた。しかし、『楚辭』や漢賦を仔細に見てゆくと、この二つは決して對等ではなく、夏の涼しさの方がより重要なものとして描かれていることが分かる。

『文選』卷十三宋玉「風賦」は、宮殿を描くものではないが、温かさと同しさをもちたらす風を對比的に描く點が示唆的である。宋玉は王の問いに對し、風には二種類あると述べる。それは、王の風「雄風」と庶民の風「雌風」であり、「雄風」は清涼で、それに當った者の病は癒え、「雌風」は、温かいところ書かれていないが、それに當たると病になつて發熱するとされている。すなわち、涼しさを生じると「雄風」は肯定的に捉えられるのに對し、發熱をもたらす「雌風」は、「雄風」の對極に位置するものとして、否定的に扱われているのであ

る。また、時代は降るが、『藝文類聚』卷六十四などに残る晉・庾闡の「狹室賦」には「清室」と「温房」の語が見える。この作品は、「招魂」以來の涼しい室の描寫を受け繼いで「清室は以て暑さに遊ぶべし、泳を冽しくして夏に寒を興こさず。(清室可以遊暑、不冽泳而興夏寒。)」と、氷を用いずにも涼を得られるものとして「清室」を描くが、「温房は悄凄たりて以て涼を興こし、軒檻は寥豁たりて以て外を朗らかにす。(温房悄凄以興涼、軒檻寥豁以外朗。)」と「温房」にも涼しさを描く。この賦は、狭く蒸し暑い屋敷にもたらされた涼しさを描くものであり、ここに見える「温房」の語は、温かな心地よい部屋ではなく、夏の蒸し暑い部屋として否定的な意味に用いられているのである。

このように、「涼」に對立するものとして、「温」はしばしば否定的に扱われる。また、建造物などを描いた詩賦の中で、夏における「涼」のみを單獨で描く例は數多く見られるのに對し、冬における「温」のみを描くものは、管見の限り一例も見出せない。たとえば『文選』卷十一王延壽「魯靈光殿賦」と『藝文類聚』卷六十二繁欽「建章鳳闕賦」は前者の例である。

王延壽「魯靈光殿賦」：陰夏に隠れて以て中に處れば、熒寥寥として以て崢嶸、鴻熒熒として以て熒熒、颺蕭條として清冷たり。  
(隱陰夏以中處、熒寥寥以崢嶸。鴻熒熒以熒熒、颺蕭條而清冷。)  
繁欽「建章鳳闕賦」：蒸暑の煖赫たるに當りて、北楹を歩みて周旋す。(中略)楹は六翮のごとくして以て撫時し、高風の清涼たるを俟つ。(當蒸暑之煖赫、步北楹而周旋。)(中略)楹六翮以撫時、  
俟高風之清涼。)

王延壽は魯の靈光殿内の一室、繁欽は長安建章宮の鳳闕に、酷暑の

中でも涼を得られる場所があると述べているが、この二作品にはいずれも冬でも温かい場所については言及がない。中國古典文學はもともと對の概念を好むものである。避寒と避暑は容易に對となしえる上に、建造物を贊美し、あわせて建造者を稱えることを目的とする賦においては、兩者を對として描くことこそふさわしい。さらに前章で述べたように、冬にも温かく夏にも涼しいことは、宮殿においても幕室においても、陰陽の調和をもたらしものとされてきた。漢代の世界觀からすれば、その一方を缺くことは、著しくバランスを失うことであろう。にもかかわらず、夏における「涼」のみが單獨で描かれるのは、それが冬における「温」にもまして重視されていたからではないか。宮殿を描く詩賦のみならず、建安時代に集中的に作られた宴の詩にも、暑い最中に涼しさを得たとの描寫がたびたび見いだせる。『文選』卷二十劉楨「公讌詩」を引く。

永日行きて遊戯し、懼樂は猶ほ未だ央まず。遺思は玄夜に在り、相與に復た翱翔す。輦車は素蓋を飛ばし、從者は路傍に盈つ。月出でて園中を照らし、珍木は鬱として蒼蒼たり。清川は石渠を過ぎ、流波は魚防を爲す。芙蓉は其の華を散じ、齒齒は金塘に溢る。靈鳥は水裔に宿り、仁獸は飛梁に遊ぶ。華館は流波を寄せ、駘達として風涼來る。生平は未だ始めて聞かず、之を歌へども安んぞ能く詳らかにせん。輪を投じて長歎息す、綺麗忘るべからず。

(永日行遊戯、懼樂猶未央。遺思在玄夜、相與復翱翔。輦車飛素蓋、從者盈路傍。月出照園中、珍木鬱蒼蒼。清川過石渠、流波爲魚防。芙蓉散其華、齒齒溢金塘。靈鳥宿水裔、仁獸遊飛梁。華館寄流波、駘達來風涼。生平未始聞、歌之安能詳。投輪長歎息、綺麗不可忘。)

詩人たちは晝間から遊興に出かけ、夜にいたって園林へと移動する。そこに見える景物を描いた後、「華館寄流波、駘達來風涼。」と、やや唐突に涼風の到來したことを述べ、宴の素晴らしさを稱えて結ぶ。すなわち一群の景物描寫の中で、涼しきは結びの部分で擔っているのである。さらに涼しさが描かれる公宴詩の例を擧げる。同卷二十王粲「公讌詩」(前半)と『藝文類聚』卷三十九曹植「侍太子坐」(前半)は以下の通りである。

王粲「公讌詩」(前半)

昊天は豊澤を降り、百卉は葳蕤を挺す。涼風は蒸暑を撤ぎ、青雲は炎暉を却く。高會す君子の堂、竝び坐す蔭華の榭。嘉肴は圓方に充ち、旨酒は金疊に盈つ。……(昊天降豊澤、百卉挺葳蕤。涼風撤蒸暑、青雲却炎暉。高會君子堂、竝坐蔭華榭。嘉肴充圓方、旨酒盈金疊。)

曹植「侍太子坐」(前半)

白日は青春に曜き、時雨は飛塵を静む。寒氷は炎景を辟け、涼風は我が身に飄る。清醴は金觴に盈ち、肴饌は縱横に陳ぶ。……(白日曜青春、時雨靜飛塵。寒氷辟炎景、涼風飄我身。清醴盈金觴、肴饌縱横陳。)

王粲は冒頭に恵みの雨と、草花の生育を描き、續けて涼しくなったことを言い、さらに續けて宴の行われる場所、食べ物、音楽などを描いて宴の素晴らしさを描寫する。曹植も王粲と同様、景物の描寫の後、涼しさを述べ、饗される食べ物、音楽などを擧げてゆく。所謂公宴詩ではないが、主催者側から宴を詠う曹丕「夏日詩」は、冒頭から避暑の宴によって涼しさを得られたと述べ(夏時饒溫和、避暑就清涼。)、續けて音楽、食べ物、遊戯を羅列する。宴に酒や食べ物、音楽はつき

ものであるが、涼しさと宴とは本來的には関わりがない。曹丕の宴は避暑の宴であり、宴によって清涼な心地になったとするのは理解できても、宴の楽しさによって暑さを忘れ清涼感を得たのではなく、宴が始まろうとするまさにそのときに、宴に先駆けて風が吹き、涼を得たと描かれているのである。先に引いた劉楨の詩も、また宴に言及し賛美する句の直前に涼風が描かれている。

以上のような公宴詩に描かれる涼しさは何を意味するのであろうか。これらは決して宴が夏に催され、そこに風が吹いたから景物として描いたという類のものではないであろう。川合康三「うたげのうた」<sup>10</sup>は建安の公宴詩について「周囲の景物を後代のように審美觀に合致する美として受け取るのではなく、あたかも天がうたげを祝福し、恩寵を與えてくれるかのような光景として享受する、神の祝福の顯現として外界を敘述してゆく」と指摘しているが、涼しさの描寫もまた同様の視點から捉えられたものと考えたい。宴を描く詩賦が多く主催者の長壽などを言祝いで結ばれるのは、「うたげのうた」で既に述べられた通りである。涼しい風は「神の祝福の顯現」である「靈鳥」「仁獸」と並び、公宴詩に描かれている。すなわち、涼風は、ただそこに在った自然現象としてではなく、鳥を「靈鳥」、獸を「仁獸」と呼ぶのと同じ觀點から、瑞祥の一つとして數ある景物の中から敢えて選び取られているのであり、「涼風」によって周囲の暑さが和らぐことは、それ自體が天の祝福のひとつの現れであったと考えるべきであろう。王粲、曹植詩では、「涼風」は宴の始まりに先驅け、天から與えられるものとして描かれ、劉楨詩では一連の瑞祥群の結びの位置にあって、天の祝福をより確かなものとしているのであり、うたげをより一層め

でたいものとしているのである。

建安時代には、公宴詩の作者である王粲や曹植らによってたびたび賦の競作がなされていた。そのうちの大規模なもの一つに「大暑賦」がある。「大暑賦」は類書に引用されて残るのみで、王粲、曹植、劉楨、繁欽らの現存する作品はいずれも完全な姿と見なしがたい。その中でも比較的長い部分を殘す王粲と曹植の「大暑賦」では、前半において暑さを描寫し、後半になると打って變わって涼やかな宴を描き出す。紙幅の都合で詳細は省くが、他の作品もまた同様の構成を持っていたと推定される。

ここでは王粲の賦を例に挙げる。抜粹に留めるが、「惟れ林鍾の季月、重陽は積もりて上升す。(惟林鍾之季月、重陽積而上升。)」に始まる前半は、以下のように暑さに苦しむ生き物たちの姿を言葉を盡くして描く。植物でさえ枯れ果てる暑さに、動物たちもどうすることもできず(根生苑而焦炙、豈含血而能當。)、人は座っていても立っていても暑さに苦しめられ(患枉席之焚灼、譬洪燎之在牀。)、逃れるすべもなく(起屏營而東西、欲避之而無方。)、風を待っても熱風が吹くばかりで(仰庭槐而嘯風、風既至而如湯。)、息苦しく汗で着物がぐっしょりになるほど(氣呼吸以祛裾、汗雨下而沾裳。)、水浴びをしても涼しくならない(就清泉以自沃、猶渙忍而不涼。)。このように苛酷な夏の暑さを様々な言葉を盡くして述べた後、王粲は涼やかな避暑の情景を描くのである。

……是に於いて帝后時に順ひ、九峻の陰岡に幸し、甘泉の清野に託し、華殿を林光に御す。廣室の邃宇に潛み、寒流を下堂に激しうす。重屋は百層にして、垂陰は千廡たり。九闔は洞開し、周帷は高擧す。堅冰は常に奠され、寒饌は代敘す。(於是帝后順時、

幸九峻之陰岡、託甘泉之清野、御華殿于林光。潛廣室之邃宇、激寒流於下堂。重屋百層、垂陰千廡。九闔洞開、周帷高舉。堅冰常奠、寒饌代絃。

王粲は、冷たいせせらぎを有する、廣大で涼やかな宮殿をまづ描き、そこに饗される冷たい食べ物を描いている。恐らくこの後に缺落部分があるのではないかと思われるが、ここでは措く。同様に劉楨「大暑賦」には「冰漿を玉醴に實す。(實冰漿於玉醴。)」と冷たい飲み物を、曹植賦には「寒泉は涌流して、玄木は榮を奮ふ。(寒泉涌流、玄木奮榮。)」という冷たいせせらぎと樹木を、あるいは「素氷を幽館に積み、氣は飛結して霜を爲す。(積素冰於幽館、氣飛結而爲霜。)」と涼やかな宮殿を描く。また曹植には「白雪を琴瑟に奏すれば、朔風感じて涼を増す。(奏白雪於琴瑟、朔風感而増涼。)」との句が見える。これは「陽春白雪」という樂の名を踏まえ、その「白雪」から涼しさへの連想を引き出しつつ、天を感じしめて涼を與えられるほど、素晴らしい音楽が演奏される様子を描いているのである。これら「大暑賦」の現存部分に共通する注目すべき点として、暑さと涼しい宴の描寫は混在することなく、截然と分かれていることを指摘したい。つまり、公宴詩と同様、宴を描く部分には一切暑さへの言及がなく、涼しさのみが繰り返し述べられているのである。繰り返され、強調される涼しさは、それが宴において非常に重視されるべきものであったことを意味する。この避暑の宴は、逃れ得ぬ暑さの中行われたものでありながら、天から特別な祝福を受けて涼やかなものであったのだということをも、一連の「大暑賦」は述べようとしているのである。

第2章では、陰陽の調和を失いながらも、暑さのみを排除する宮殿が描かれ、宴の描寫においても、暑さの中の涼しさが「神の祝福の顯

現」として描かれることを明らかにした。では、そこで排除されることとなる「暑さ」とはいかなるものであったのであろうか。

### 3 「招魂」の四方位

『楚辭』「招魂」冒頭では、東西南北と上下それぞれの危険を説いて、「魂兮歸來」と呼びかける。暑さの持つ意味を考えるにあたり、まずはその四方位について検討したい。

松田稔「山海經」の基礎的研究<sup>22)</sup>「方位觀の變遷」は、『楚辭』が四方に魂を招くことを「神聖國家として卜占をその手段の代表とする巫術によってあらゆる事を決し、四方性を世界觀とする殷民族から、その影響を強く受けている」ものであるとして、『禮記』『儀禮』『周禮』に見える、北に向かい魂を招く「合理性を尊ぶ周民族」の復の儀式とは、系統の異なるものであると指摘する。では、「招魂」の東西南北の地は、どのような姿で描き出されているのだろうか。以下にまづ本文を引く。初めに描かれるのは東方である。

魂よ歸り來れ、東方は以て託すべからず。長人は千仞たりて、惟れ魂を是れ索す。十日代出して、金を流し石を鑠す。彼皆之に習ふも、魂は往けば必ず釋く。歸り來たれ。以て託すべからず。  
(魂兮歸來、東方不可以託些。長人千仞、惟魂是索些。十日代出、流金鑠石些。彼皆習之、魂往必釋些。歸來兮、不可以託些。)

東方には巨人がいて、魂を狙っており、十の太陽が交互に昇って、暑さのあまり金屬や石は溶けて液體になる。魂がそこに至れば溶けてしまふほどの酷暑であり、身を寄せることはできないのである。

ここに見える「十日代出」<sup>23)</sup>は、十日神話の一種であるが、現存する十日神話には、いくつかのヴァリエーションがある。「山海經」には、

十日が沐浴する湯谷の話（海外東經）、女丑が十日を生んで焼死した話（海外西經）、帝俊の妻である羲和が十日を生んだ話（大荒南經）などがあるが、いずれも十日が人々を苦しめたとの記述はない。『淮南子』「本經訓」には堯の時代のできごととして、「十日竝び出で、禾稼を焦がし、草木を殺し、民に食らふ所無し。（十日竝出、焦禾稼、殺草木、而民無所食。）」と、田畑、草木を枯らして飢饉をもたらした十日の被害を述べて、羿に命じて九日を射落とさせたことを記す。また、『楚辭』「天問」の「羿は焉ぞ日を彈いたる、烏は焉ぞ羽を解きたる。（羿焉彈日、烏焉解羽。）」に附された王逸注には、「『淮南』に言ふ、堯の時 十日竝出し、草木焦枯す。堯は羿に命じて十日を仰射せしめ、其の九日に中たる。日中の九鳥は皆死し、其の羽翼を墮し、故に其の一日を留む、と。（淮南言堯時十日竝出、草木焦枯、堯命羿仰射十日、中其九日、日中九鳥皆死、墮其羽翼、故留其一日也。）」とある。この文は現在の『淮南子』には見えないが、十日が草木を枯らした点、堯が羿に命じて九日を射落とさせた点が「本經訓」の十日神話と一致する。『淮南子』に見える十日はいずれも早魃を引き起こす恐ろしい存在であり、羿が日を射たとする「天問」の「日」も、早魃の要因となる恐ろしい存在だったのであろう。しかし、『莊子』「齊物篇」には堯が舜に語った言葉として、「昔は十日竝び出で、萬物皆照らさる。況んや徳の日より進かなる者をや。（昔者十日竝出、萬物皆照、而況徳之進乎日者乎。）」と見える。この十日は『淮南子』と同様に、堯のときのできごととするが、竝び出でいながら人々に益する存在である。

以上のように、神話傳説に見える十日の描かれ方はまちまちであり、いずれが原初の形であるかについては諸説ある。松丸道雄「殷人の觀

暑さへの恐怖

念世界」などに見える、殷の太陽信仰と十氏族の制度が十日神話の源であるとの説が、現在では有力視されているが、本論ではいずれが最初に近いかはひとまず措く。ここで重要なのは、「招魂」の十日が、『楚辭』「天問」や『淮南子』と同様に、酷暑をもたらし、人々を害するものとして描かれている点である。

なお、「招魂」の本文について、出石誠彦は「代」を「竝」、聞一多「楚辭校補」は「代」を「并」、王泗原「楚辭校釋」は「代出」を「繼出」となすべきとするなど、「代出」を誤りとする見解も多い。

續いて南方の描寫である。

魂よ歸り來れ、南方は以て止まるべからず。雕題 黑齒、人肉を得て以て祀り、其の骨を以て醢と爲す。蝮蛇は藜藜として、封狐は千里たり。雄虺は九首にして、往來すること儻忽たり、人を呑み以て其の心を益す。歸り來れ。以て久しく淫すべからず。（魂兮歸來。南方不可以止些。雕題黑齒、得人肉以祀、以其骨爲醢些。蝮蛇藜藜、封狐千里些。雄虺九首、往來儻忽、吞人以益其心些。歸來兮。不可以久淫些。）

南方では、顔に入れ墨をし（雕題）、齒を黒く染めた人々（黑齒）が、人肉を祭祀に用い、骨を漬け物にし、あるいは恐ろしい蛇（蝮蛇）や狐（封狐）や怪物（雄虺）が跋扈して、人を食らうという。ここには、表面上は寒暑への言及はない。だが、王逸は蝮蛇への注釋の中で、南方を「炎土」と表現している。

炎土の氣ありて、蝮虺惡蛇多く、積聚すること藜藜たりて、争ひて人を齧まんと言ふ。（言炎土之氣、多蝮虺惡蛇、積聚藜藜、争欲齧人。）

すなわち、暑い場所であるから凶悪で危険な蛇の類が多いのだと説



明するのである。『山海經』に「多蝮」とされる三カ所はいずれも「南山經」の山であることから、一般に、毒蛇が多いのは、南方の特色であると考えられていたことが窺える。王逸は南方には「炎土之氣」があることを自明のこととして扱っている上、有害な蛇が多いことと暑さの間に、深い關係があると理解している。「招魂」に描かれた南方は、寒暑に觸れていないものの、暑い土地として描かれているものと考えたい。

「招魂」は續けて西方を描く。

魂よ歸り來れ。西方の害たるや、流沙は千里たり。雷淵に旋入し、靡散して止まるべからず。蚤に脱するを得るも、其の外は曠宇たり。赤螳は象の若く、玄蠶は壺の若し。五穀は生じず、菅を藁めて是れ食らふ。其の土は人を爛れしめ、水を求むれども得る所無し。彷徨して倚る所無く、廣大にして極める所無し。歸り來れ。自ら遺賊たるを恐る。(魂兮歸來。西方之害、流沙千里些。旋入

雷淵、靡散而不可止些。蚤而得脱、其外曠宇些。赤螳若象、玄蠶若壺些。五穀不生、藁菅是食些。其土爛人、求水無所得些。彷徨無所倚、廣大無所極些。歸來兮。恐自遺賊些。)

西方については、その廣大な流砂の沙漠と、雷淵(未詳)という地名を示し、留まってはならぬと警告する。さらに運良くそこから逃れても、その先に廣がるのは、危険な動物(赤螳／玄蠶)がいる上、穀物は實らず、草を食らうほかない不毛の土地である。その大地は人をただれさせ、渴きを癒す水も手に入らない。「其土爛人、求水無所得些。」については、王逸が「西方の土は、溫暑にして熱く、人肉を焦爛す。渴して水を求めんと欲すれど、源泉有る無く、之を得べからざるを言ふなり。(言西方之土、溫暑而熱、焦爛人肉。渴欲求水、無有

源泉、不可得之也。)」とし、西方の土地が暑く乾ききまっていることを言うとしているが、この句も著しい暑さを言うものである。そしてこの廣大な土地には身を寄せるべき場所もなく、さまざま自らを損なうだけであると述べて、魂に歸還を促すのである。

以上、東西南の三方については句數を費やして、その地の害悪や怪物を描き、酷暑の地であることを繰り返して述べている。それに對し、北方は少し雰圍氣を異にする。

魂よ歸り來れ。北方は以て止まるべからず。氷を増すこと峨峨たり、雪を飛ばすこと千里たり。歸り來れ。以て久しくすべからず。(魂兮歸來。北方不可以止些。增冰峨峨、飛雪千里些。歸來兮。不可以久些。)

東西南に比べて明らかに短い上に、氷と雪とを述べるだけで、その地の害悪や怪物についての言及は見られない。王逸も「北方は常に寒く、其の氷は重累して、峨峨たること山の如し。涼風は急時たりて、疾雪は之に隨ひ、飛行すること千里にして、乃ち地に至るを言ふなり。(言北方常寒、其冰重累、峨峨如山。涼風急時、疾雪隨之、飛行千里、乃至地也。)」、「其の寒きこと人を殺し、久しく留まるべからざるを言ふなり。(言其寒殺人、不可久留也。)」と注記し、あくまで寒さと強風とを述べるに留まり、神話を下敷きとした表現もないようである。このように、「招魂」の東西南北では、東西南の三方位に酷暑の危険を言い、北のみに酷暑の危険を言う。量の上でも少ない「寒さ」であるが、金屬や人を溶かしてしまふ東方の暑さ、人を食らう野蠻人や獐猛な野獸や毒蛇がいる南方の暑さ、乾ききって五穀も生じない西方の暑さに比べ、氷や雪のみが描かれる北方の寒さは、想像力に訴えて恐怖を感じさせる力もいささか弱いように思われる。それはすなわち

暑さへの恐怖が寒さへの恐怖よりもはるかに強かったことを意味しているのではないか。「招魂」の作られた背景には、人を損なう暑さへの恐怖が人々の意識の根底に強く存在していたからこそ、このようなかたよりが生じたのではないだろうか。

さらに「招魂」では上下についても危険であると述べるが、寒暑への言及がないので、ここでは省略する。また「楚辭」「大招」は、「招魂」と同様に魂を招く作品であり、構成が近似している。「大招」でも四方が危険であると述べるが、北を酷暑、南を酷暑の地として描き、東、西には寒暑いずれの描寫も見えない。寒暑への言及のある南北は、以下の通りである。

魂よ南する無かれ、南に炎火千里有りて、蝮蛇は蜒たり。山林は險隘たりて、虎豹は蜿たり。鱗鱗短狐、王虺は騫たり。魂よ南する無かれ、蜮は躬を傷ましむ。(魂乎無南、南有炎火千里、蝮蛇蜒只。山林險隘、虎豹蜿只。鱗鱗短狐、王虺騫只。魂乎無南、蜮傷躬只。)

魂よ北する無かれ、北に寒山有り、連龍は絶たり。代水は渉るべからず、深さは測るべからず。天は白きこと顛顛たり、寒きこと凝凝たり。魂よ往く無かれ、北極に盈たん。(魂乎無北、北有寒山、連龍絶只。代水不可涉、深不可測只。天白顛顛、寒凝凝只。)

魂乎無往、盈北極只。)

南方は、酷暑と、山林の險しさ、獸たちの獍猛さを述べ、ここでも「招魂」と同様、毒蛇(蝮蛇、王虺)が擧げられている。北方は「招魂」と同じく、寒いことのみを言い、「連龍」「代水」という地名が擧げられている點が、多少具體的な感があるものの、南北ともに「招魂」の酷暑の地ほどには生々しい恐ろしさは感じられない。

以上のように、「大招」の東西南北の描き方は、三方までを酷暑の地とした「招魂」とは全く異なった感覚に基づいているように思われる。松田稔は「方位觀の變遷」において、四方位を東西南北の順で呼ぶ「環狀稱呼」を殷文化の特徴として指摘し、それが「諸物を四種に分類して意識する殷人の理論を根底とし、四時と四方との結合を見、その延長線上に位置する迎季や生者死者の魂招きといった巫術において現れている」とする。確かに「大招」では四方の危険を述べる件は東西南北の順であり、南が暑く、北が寒く、東西には温かさや涼しさが描かれていないものの、四方を四季にあてることも不可能ではない。だが、「招魂」の東西南北については、暑い地が三方位、寒い地が一方位である。「方位觀の變遷」では四方の順のみに言及し、各方位について描かれた内容には踏み込んでいないが、「招魂」の内容から見ると、東西南北の順に描かれる地の描寫の中には、四季の巡りと結びつく發想は見えない。むしろ、特徴となすべきは、暑さに對する強烈な恐怖心である。

『楚辭補註』によれば、「招魂」は宋玉作、「大招」は屈原もしくは景差作とされているが、實際の作者、成立の順序、兩作品の影響關係などについては諸説あり、ここでは兩者の關係についてはひとまず措く。重要なのは、後世の暑さや涼しさの描寫は、「大招」ではなく「招魂」を踏まえてこそ成り立つものであるという點である。第2章に見た漢魏の詩賦に散見する特色は、清涼を重んじる意識から生じたものである。涼しさは、暑さが恐ろしいものであるからこそ尊ばれる。「招魂」は、暑さへの恐怖心を明白に描く作品であり、涼しさを著しく重視する文學的觀念を讀み解く上で、極めて重要な意味を有する作品なのである。

## 結

暑さへの恐怖心は、寒さへの恐怖よりもはるかに強烈に文學の中に立ち現れる。この暑さに對する恐怖は、暑さを退ける涼しさへの贊美として受け繼がれてゆく。夏は確かに疫病が流行しやすく、旱魃も起こりやすい。さらに、逃れるすべのない暑さは毎年人々を苦しめたであろう。ゆえに暑さに對する恐怖心は際だつて強いものであつたかもしれない。だが、「飢寒」という言葉が熟していることから窺えるように、古代においては食べ物を手に入れにくく、凍死の危険のある冬は、夏に數倍して死を身近に感じる季節だつたはずである。にもかかわらず「招魂」では暑さを恐れる心性が強調され、漢魏の詩賦では、暑さを退ける涼しさが繰り返して描かれており、寒さとそれを退ける温かさには同様の現象は見いだせない。この著しい偏重は、本來生理的な實感として生じた暑さに對する恐怖感が、一つの觀念として、現實の生活感覺から獨立し、廣く人々に共有されていたために生じたものであらう。

その觀念は序章に述べた漢代の儒家的な寒暑觀とどのように關わるものであらうか。寒暑を對として扱ひ、天と君王との感應の一環として寒暑を理解するという面においては、第1章で取り上げた諸作の寒暑觀は、儒教のそれと一致する。漢鏡歌「上之回」の「以て甘泉宮に寒暑の徳を承く。(以承甘泉宮寒暑徳。)」や、「遠夷慕徳歌」の「冬は霜雪多く、夏は和雨多し。寒温の時に適ひ、部人の多き有り。(冬多霜雪、夏多和雨。寒温時適、部人多有。)」などの詩句からも、儒家正統の寒暑觀が窺える。だが、第2章で挙げたように、一方では陰陽の調和を無視し、夏における涼しさのみを述べて、宮殿を稱える作品や、

宴の涼しさを「天による祝福」として描く作品が作られた。儒家の思想が國家の中心思想として尊ばれた漢代に、このような作品が作られたことは注目値する。これらの背後にあつたのは、『楚辭』「招魂」や「風賦」を生み出したものに通じる觀念であり、それは儒家正統の寒暑觀とは異なるものであつたと考えられる。

この意識が、詩賦に限らず廣く定着したものであつたことは、「清暑」「清涼」などの言葉からも端的に見て取れる。曹植は「光祿大夫荀侯誄」において、荀彧を稱えて「冰の清きが如く、玉の絜きが如し。(如冰之清、如玉之絜。)」と、人柄の清らかさを、氷の「清」に喩えている。『三輔黃圖』によれば未央宮の清涼殿は延清室とも呼ばれ、曹植「七啓」に見える夏にも涼しい部屋は「清室」と稱せられていた。さらに『文選』における「清涼」は「清らかな涼しさ」であり、「清暑」は「暑さを清める」である。なお、「清寒」という形で熟してはいないが、暑さと同様に避けるべき存在である寒さについて、「寒」であるものを「清」と評する表現は少なくない。これらの用例からは、「寒さ」「涼しさ」と「清らかさ」は近似する感覺であり、「暑さ」は「清らかさ」に對立する感覺であることが読み取れる。すなわち、暑さは清められねばならないものであつた。

この傾向は漢魏のみに終わるものではない。宋・孝武帝らによる「華林清暑殿賦」のように避暑宮殿の涼しさを稱える賦の競作もあり、陳・徐陵「奉和簡文帝山齋詩」では「竹密にして山齋冷え、荷開きて水殿香し。(竹密山齋冷、荷開水殿香。)」と山齋の涼しさを好ましいものとして描く。また、第2章で引いた晉・庾闡には「狹室賦」の室内描寫、同じ庾闡「閑居賦」には庭の描寫の中に「陰興こりて則ち暑は退き、風來たりて則ち氣は清し。(陰興則暑退、風來則氣清。)」と

の句が見え、これらは個人の邸宅の「涼」の描寫である。そしてこれらの用例の中に、涼との對以外で、温かさに言及して稱える表現は、管見の限り見いだせない。天からの祝福といった意味は薄まっただけのもの、「温」ではなく「涼」を好ましいものとして描くこの傾向は、本論に述べてきた寒暑の價值觀が、廣く文學の底流として、晉代以降にも浸透していた證であると言えるのではないだろうか。

序に引いた通り、松浦友久は詩中の夏冬に共有される感覺は「生理的的感覺に關するものだけであり、心理、心情の次元に關する共通感覺としては、ほとんどまったく成立していない」としている。本論は必ずしも夏そのものを描いた詩賦を對象としたものではないが、「暑さ」とそれを清める「涼しさ」は、夏を描く際に缺かすことのできない重要な要素である。これらは、もとをただせば生理的的感覺に起因するものであるが、漢魏の詩賦の中には、決して生理的的感覺だけでは片付けられない定着した發想が見いだせる。それは「招魂」に見える暑さへの恐怖であり、宮殿賦や公宴詩に見える暑さの中の涼しさを尊重する意識である。同様の現象は、寒さと温かさの關係においては見いだし得ない。そしてその發想は「清暑」「清涼」の語や、あるいは後世の作品群に見えるように廣く定着し、人々の感覺に染み渡っている。これこそが、儒家的な寒暑觀とは異質の、中國古典詩文の中に共有される夏の心理、心情なのである。

『洞冥記』卷四で東方朔が語る「柔毫梅」、『西京雜記』卷一に見える丁緩の「七輪扇」、『拾遺記』卷四に見える燕昭王の「銷暑招涼之珠」などは、夏にも涼しさを得られる寶物として珍重されている。これらは、暑さを恐れる心性があったからこそ尊ばれたものであろう。また、賈誼「早雲賦」や、本論で挙げた「大暑賦」など、暑さを人々を損な

うものとして描く詩賦は、「招魂」以降にも決して少なくない。それらの作品にも夏の心理、心情が共有され、暑さへの恐怖心やそこから派生した觀念が見いだせる。これらの點については稿を改めて論じることとしたい。

注

- (1) 大修館書店 1986
- (2) 嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』（中華書局）、費振剛ほか『全漢賦』（北京大學出版社 1983）などに見える漢魏六朝の賦のうち、題名に春夏秋冬を含むものを数えると、春十一首、夏一首、秋十四首、冬三首となる。
- (3) 『禮記』相近於坎壇祭寒暑也。／『孔叢子』祖迎於坎壇、所以祭寒暑也。／『禮記』の解釋は竹內照夫『禮記』（明治書院 1976）を参照した。
- (4) 庶徵、曰雨曰暘曰燠曰寒曰風。（中略）曰休徵（中略）曰哲、時煥若。曰謀、時寒若。（中略）曰咎徵、（中略）曰豫、恆煥若。曰急、恆寒若。（後略）／解釋は加藤常賢『書經』（明治書院 1983）を参照した。
- (5) 喜則爲暑氣而有養長也。怒則爲寒氣而有閉塞也。
- (6) 續けて『漢書』を引き「清室則中夏含霜。」とするが、これは曹植「七啓」が混入したものとと思われる。また『三輔黃圖』卷二は長樂宮に温室殿があったことを指摘し、清涼殿など涼しい宮殿の記載を缺く。だが、長樂宮温室殿については『漢書』などにその存在を明らかに示す記事はなく、『三輔黃圖』と『漢書』晉灼注に見えるのみである。また、『三輔黃圖』卷三に引く『西京雜記』には未央宮温室殿の調度に關する記事が見えるものの、現行の『西京雜記』には該當記事は見えない。
- (7) 中華書局 1996

- (8) たとえば、渡邊信一郎「宮闕と園林——3〜6世紀中國における皇帝權力の空間構成——」『考古學研究』第47卷2號(2000)は、六朝期についての議論であるが、魏の洛陽宮が「天の星象配置」を模していることを指摘し、「天子・皇帝權力の根源が天に由來し、天を具象する星象を地上に再構成したもの」として、「天上の秩序と地上の秩序とをその全體性において我が物にせんとする企て」を持っていたとする。
- (9) 上海古籍出版社 1986
- (10) 「冢賦」は『藝文類聚』卷四十、「初學記」卷十四、『古文苑』卷五にも採録されており、多くの異同があるが、「在冬不涼、在夏不暑。祭祀是居、神明是處。」の十六文字は三本とも一致し、『古文苑』は「不涼」について「一作不寒」と注記する。
- (11) 大修館書店 1998
- (12) 『アジアカ文化交流研究』2007
- (13) 故其清涼雄風、則飄舉升降。(中略) 故其風中人狀、直慳悽慄、清涼增歎。清清冷冷、愈病析醒。
- (14) 故其風中人狀、直愾瀟鬱邑、毆溫致濕。中心慘怛、生病造熱。
- (15) 「泳」は「冰」の誤りであろう。
- (16) 前漢・揚雄「甘泉賦」「其遠則九峻甘泉、涸陰沍寒。日北至而含凍、此焉清暑。」／後漢・李尤「堂銘」「夏屋渠渠、高敞清涼。」／宋・孝武帝はか「華林清暑殿賦」など。
- (17) 曹植「公燕詩」、應瑒「侍五官中郎將建章臺集詩」、阮禹「公宴」など、涼しさの描かれない公宴詩やその佚詩もある。
- (18) 『中國文學報』五十三號 1996
- (19) この点について川合は「建安の詩には暑さが過ぎて涼しくなる時節が人を快適にさせるものとして設定されているのが目立つ」とのみ指摘している。
- (20) 繁欽賦は「暑賦」の名で残る。
- (21) 「招魂」には宮殿で出される酒について「挫糟凍飲、酌清涼些。」と冷たい酒にのみ言及する。ただし、左思「魏都賦」の「凍醴流澌、溫酌躍波。」のように、冷たい酒と温かい酒を對とする例もある。
- (22) 宋玉「高唐賦」の「玄木冬榮、煌煌發榮。」を踏まえる。
- (23) 宋玉「高唐賦」の「絢大絃而雅聲流、冽風過而增悲哀。」を踏まえる。
- (24) 笠間書院 1996
- (25) 王逸は「言東方有扶桑之木、十日竝在其上、以次更行、其熱酷烈、金石堅剛、皆爲銷釋也。」と注を附す。
- (26) 有害な十日を原初の形とするもの：出石誠彦「上代支那の日と月との説話について」『支那神話傳説の研究』中央公論社 1983) ほか／無害な十日を原初の形とするもの：杉本直治郎・御手洗勝「古代中國における太陽説話——特に扶桑傳説について——」『民族學研究』第十五號(1951)、松丸道雄「殷人の觀念世界」、『中國古文字と殷周文化』東方書店 1989)、松田稔『山海經』の基礎的研究』『太陽の神話』ほか。
- (27) 『聞一多全集』湖北人民出版社 1993
- (28) 人民教育出版社 1990
- (29) 王逸の東方「白皓膠只」への注釋には「皓膠、水凍貌也。言大海之涯、多霧惡氣、天常甚雨、如注墮水、冬則凝凍、皓然正白、回錯膠戾、與天相薄也。」とあり、冬に寒いことを述べる。また、十日神話において日の昇る地とされる、湯谷の名も見えるが、ここに暑さへの言及はない。
- (30) 『後漢書』卷八十四「南蠻西南夷列傳」
- (31) 「清暑」については先述の卷二張衡「西京賦」、卷十潘嶽「西征賦」の二例のみ。「清涼」については、卷十三宋玉「風賦」の「故其清涼雄風、則飄舉升降。」、卷三十三「招魂」の「挫糟凍飲、酌清涼些。」がある。
- (32) 時代は下るが、唐・李賀「自昌谷到洛後門」の「石澗凍波聲、雞叫清寒晨。」など。また「溫」「暖」が「清」と共に用いられる例はほとんど見られない。